

エ 効果的な職場体験活動・インターンシップの在り方

子ども・若者に自らの将来を考えさせるためには、学校内における教育活動だけではなく、具体的に多様な年齢、立場の人や社会や職業にかかわる様々な現場を通して、自己と社会の双方についての多様な気付きや発見を経験させることが効果的です。

職場体験充実のための方策

職場体験の充実を図るためには、職場体験のねらいや目的を明確にし、生き方の指導を含めた事前・事後指導の充実、5日間の職場体験の実施等における質的向上を図る職場体験実施計画の立案が重要となります。

〔各学校の職場体験のねらい（例）〕

生徒	体験先・保護者	事前指導から事後指導への展開
<ul style="list-style-type: none"> ●人と出会い・ふれあいを大切にしよう ●社会（仕事・職業等）のよろこびや厳しさを実感しよう ●新しい自分を発見しよう ●将来について考えよう ●自ら考え学び、行動しよう ●地域について考えよう 等 	<ul style="list-style-type: none"> ●子どもたちを見つめ直すきっかけになります ●子どもたちの職業への関心を高めることができます ●子どもたちとのコミュニケーションが図りやすくなります ●子どもたちが地域社会を知り、関心を高めるきっかけになります ●地域でのコミュニケーションが一層高まります 	①職場体験実施計画の基本 ②職場体験実施に当たっての組織 ③職場体験先の確保 ④事前指導・事後指導の方策 ⑤事前指導・事後指導の効果

〔職場体験の運営にかかわるポイント〕

実施学年	実施時期	実施期間
<ul style="list-style-type: none"> ●指導のねらいを明確にし、子どもの発達段階、年間指導計画とのバランス等を考慮に入れて調整する。 	<ul style="list-style-type: none"> ●ねらいに適した時期、年間指導計画とのバランス、特別活動・総合的な学習の時間等との関連、体験先・地域への配慮等を考慮に入れて調整する。 	<ul style="list-style-type: none"> ●体験の質を高め、体験先・地域へ配慮し、調整する。

〔事前指導と事後指導のポイント（実施学年を2年次とした場合）〕

■事前指導 1年次からの進路指導 ・進路学習全体にかかわる内容の学習 ねらいや課題の確認 ・職場体験先のねらいの理解、自分の課題の発見 課題解決に向けての調査内容の検討 ・職場体験での調査内容の検討 事後の学習の理解 ・評価の方法、まとめ方、発表会等 事前指導	■事前準備（直前の準備） 1年次からの進路指導 ・体験の内容に関すること 安全・緊急対応の確認 ・安全等に関すること 社会性やルールに関する指導 ・礼儀やマナーに関すること
■職場体験に関する直後の指導 職場体験記録のまとめ ・職場体験記録をまとめる 礼状の作成（学校、生徒、保護者） ・生徒から体験先への礼状作成 報告書の作成 ・事後報告をまとめる ■事後指導 報告書を持参しての事後訪問 ・報告書、礼状（学校、生徒、保護者）等を持参しての事後訪問 ・職場体験の再評価 事後指導	■職場体験発表会に向けて 発表資料の作成 ・新聞、ポスターづくり ・コンピュータを活用したプレゼンテーション 職場体験発表会 ・職場体験の内容の発表 ・生徒間での体験の共有化 ■職場体験を終えて 職場体験の総括 ・職場体験全体を終えてのまとめ（事前、体験、事後を終えて） ・次年度に向けての課題設定

インターンシップ充実のための方策（普通科に焦点を当てて）

インターンシップの充実を図るためには、高等学校普通科において就業体験活動を実施するために障壁となっている要因の克服を目指し、次の①～⑨のようなポイントを踏まえることが大切です。

(1) 目的の明確化

- ① 生徒が自ら職業や自己の進路に係る課題を設定するなど目的を明確化する

(2) 校内体制の構築

- ② 校長のリーダーシップの下で組織的に対応する
- ③ ノウハウを蓄積する

(3) 学校外部の教育資源の活用の推進

- ④ 学校と事業所をコーディネートする学校の外部組織を積極的に活用する

(4) 学校の教育活動における位置付けの明確化

- ⑤ 入学から卒業までの指導計画の中でインターンシップを位置付ける

(5) 効果的なインターンシップの実施

- ⑥ 生徒のニーズに合わせる
- ⑦ 十分な事前指導・事後指導を実施し、レポートなどにまとめ発表するなど、さらに探究を連続する
- ⑧ 大学進学と結び付ける

オ 評価

各学校におけるキャリア教育の実践が、その教育目標を達成し、さらにより効果的なものとなるように発展させていくためには、キャリア教育の目標を明確にした上で、適切な評価を行うことが大切です。

キャリア教育における評価には、児童生徒の現状や学びの成果を把握する「見取り」と、見取りの結果や全体的な教育活動の実施状況を把握する「点検」の側面があります。評価を行う際には、キャリア教育を通して、目指す児童生徒の姿に達成することができたか、また、達成するために有効な活動を行うことができたかなど、目標や計画に立ち返り、検証改善サイクルを推進することが大切です。

「見取り」、「点検」を行うポイント

見取り	点検
<ul style="list-style-type: none">・学んだことを生活や社会につなげることができるよう、社会的・職業的自立に向けて身に付けさせたい力を明確にする・児童生徒の実態を踏まえた「目指す児童生徒の姿」を具体的に設定する・身に付けさせたい力が、将来の生き方や進路決定にどのように結びつくか示すなど、児童生徒と共有する	<ul style="list-style-type: none">・学校全体で、継続的に実践を進められる体制をつくる・身に付けさせたい力と、各教科等との関連が指導計画内に具体的に示されているなど実践の一貫性を確認する・家庭や地域とねらいを共通し連携を図るなど、キャリア教育の充実につながる関係をつくる

就業体験活動（インターンシップ）について

学習指導要領では、「学校においては、キャリア教育及び職業教育を推進するために、生徒の特性や進路、学校や地域の実態等を考慮し、地域や産業界等との連携を図り、産業現場等における長期間の実習を取り入れるなどの就業体験活動の機会を積極的に設けるとともに、地域や産業界等の人々の協力を積極的に得るよう配慮するものとする。」ことが示されています。

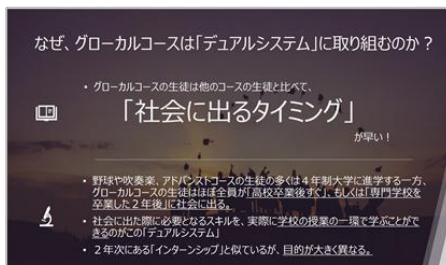
デュアルシステムの指導事例

北海道鶴川高等学校

デュアルシステムとは、若者向けの実践的な教育・職業能力開発の仕組みとして、企業等での実習と学校での講義等の教育を組み合わせることで実施することにより、若者を一人前の職業人に育てる仕組みのことをいいます。

1、2年生のグローバルコースの生徒が、学校設定科目「チャレンジスタディ」（4単位）の科目の中で、4～6校時の時間帯に月3回程度、3か月間で計8回の就業体験活動を実施しています。

訪問先の事業所について調べたり、実習の目標を設定するなどの事前学習を実施した後、町内の事業所（役場、小学校、中学校、公共施設、農業協同組合、農園、地元企業など）で実習を行いました。長期にわたる就業体験活動を実施することで、回数を重ねるごとに活動を充実させており、事業所から帰ってくるたびに精悍な顔つきになる様子が見られました。



【デュアルシステム説明会資料（一部抜粋）】

【デュアルシステムで身に付けさせたい力】

- 1 専門的な知識・技能
- 2 コミュニケーション力
- 3 主体的に取り組む力（意欲）
- 4 他人と協調しチームで活動する力
- 5 課題を発見し解決する力
- 6 地域理解・地域愛

アカデミック・インターンシップの指導事例

北海道大樹高等学校

アカデミック・インターンシップとは、大学等の専門機関において実施する就業体験活動のことをいいます。大学の研究室等と連携して、将来進む可能性のある学問分野に関係した研究活動等を体験し、視野を広げることで、生徒が「大学等の向こうにある社会」を意識し、自己の将来について考えるきっかけをつくることができます。

北海道医療大学において、2年生の希望者を対象に、医療分野に関係した研究活動の体験を実施しました。臨床検査学科を希望した生徒は、インフルエンザ検査、尿検査、顕微鏡による細菌検査、超音波検査など、臨床検査技師が担う生理検査や検体検査を体験し、看護学科を希望した生徒は、正しい手洗いの方法、ストレッチャー移動、新生児人形を用いて心音を聞くなどの体験活動を行いました。参加した生徒からは、「町の病院では高齢者が多い印象だったが、医療の分野は広く、様々な年代の患者がいることに気付いた。」、「大きな病院では様々な医療が行われていることを知り、視野が広がった。」などの感想があり、医療分野に対する見方・考え方が深まりました。

また、室蘭工業大学と大樹町の「包括連携協定」を活用することで、室蘭工業大学から講師を招き、1、2年生が、スズを用いた鋳造を行うなどの体験的な学習活動を行いました。年に5回ほど実施する予定で、工学の面白さと社会との関わりについて学んでいます。



【インターンシップ報告会の様子】



【ペーパーウェイトづくりの様子】

2 進路指導

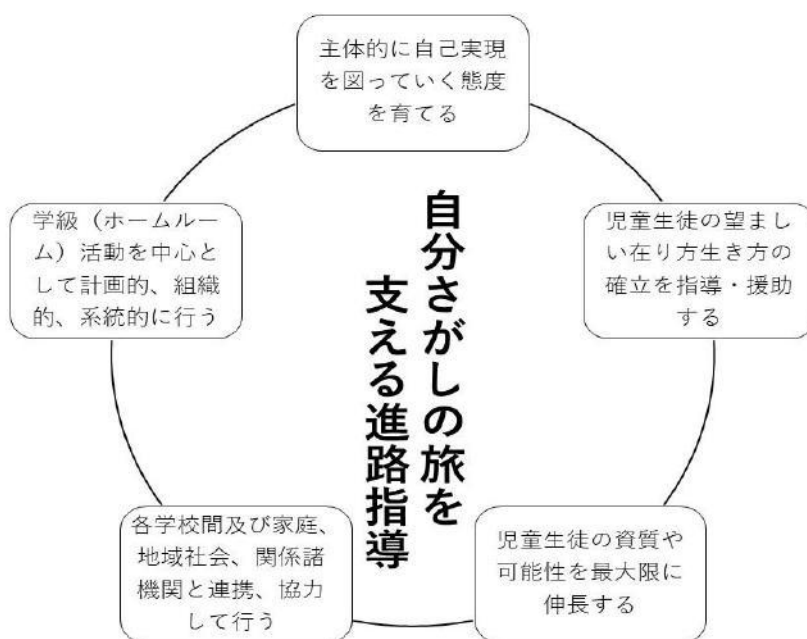
進路指導においては、児童生徒一人一人が人間としての生き方についての自覚を深め、将来に向けて夢や希望、目的意識をもって主体的に進路を選択し、生涯にわたる自己実現を図るために必要な能力や態度を育成することが大切です。

そのためには、学級（ホームルーム）活動等の指導を工夫するなどガイダンスの機能の充実を図るとともに、学校が進路指導の目標をもち、その実現を目指して教育活動全体を通じ計画的、継続的な指導を行うことが必要です。

(1) 「自分さがしの旅」を支える進路指導

進路指導は、児童生徒の特性や個性を生かし、自らの在り方生き方を求めさせる教育活動です。

したがって、各教科・科目、道徳科、特別活動などにおいて、ボランティア活動や啓発的体験などを通して、一人一人の人生観・価値観の形成を図り、児童生徒が自らの意思と責任において進路を選択・決定する能力や態度を育成することが大切です。



(2) 学校段階に応じた在り方生き方の指導

進路指導のねらいは、児童生徒一人一人の個性の自覚と伸長を図るとともに、自分に最も適した進路を自らの力で切り開き、生きがいのある人生を選ぶ力を育てることにあります。

したがって、小学校の段階から「自分がどう生きるか」について指導・援助し、社会的に真に自立した自己の在り方生き方を確立させることや、児童生徒の意欲や努力を重視し、児童生徒自ら選択した進路を堂々と進んでいけるように、児童生徒の将来における自己実現に向けて適切な指導に当たることが大切です。

学校の教育活動全体を通じて行われる進路指導

進路指導に当たっては、家庭・地域と連携し、体験的な学習を重視するとともに、各学校ごとに目標を設定し、教育課程に位置付けて計画的に行い、その状況や成果について絶えず評価を行うことが大切です。

各教科・科目、道徳科、特別活動などにおいては、次のような視点をもって在り方生き方に関する指導を充実させていくことが大切です。

各教科・科目

- ・児童生徒の職業に対する意識の醸成や、進路選択の能力や態度を育成する。
- ・進路情報の提供の場として、情報活用能力(収集、整理、活用など)を育成する。

特別活動

- ・在り方生き方に関する指導の中心として学級(ホームルーム)活動の時間を計画的に活用する。
- ・学校行事では、勤労生産・奉仕の行事を中心に、体験的な活動や啓発的な体験を行う。

学校の教育活動全体を通じて行われる進路指導

道徳科

(小・中学校)

- ・よりよい生き方についての内面的な資質を養う。

(高等学校)

- ・人間としての調和のとれた発達を図り、自らの行動を選択・決定できる資質を養う。

総合的な学習(探究)の時間

(小・中学校)

- ・横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、自己の生き方を考えることができるようにする。

(中学校)

- ・職業や自己の将来に関する学習活動などを行う。

(高等学校)

- ・横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、自己の在り方生き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決していくための資質・能力を育成する。

学校段階に応じた指導

学校と社会の円滑な接続を図るためには、望ましい勤労観や職業観及び職業に関する知識や技能を身に付けさせるとともに、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てる教育を発達の段階に応じて実施することが大切です。

小学校

自己をかけがえのない存在として意識させるとともに、自己を見つめ、自己の生き方について学ぶ機会をもたせる。

中学校

自分の個性や適性を十分理解して、将来への夢や希望を抱き、その実現に向けての努力を援助する。

高等学校

上級学校の具体的な教育内容や卒業後の職業選択との関係、企業の活動や職業生活について、具体的な情報を収集したり、就業体験の機会をもたせたりする。

特に、進学希望の中学生に対しては、次の三つの点について指導することが大切です。

- 自分の個性や適性を理解し、高等学校での学習内容や活動についてしっかりした目的をもつこと
- 学力だけで学校を選ぶのではなく、各学校の教育内容やその特色を理解すること
- 自分の意思で志望校を選択し、志望の実現に向けて努力すること

(3) 進路指導の計画と実施

ア 進路指導の全体計画

進路指導を効果的に進めるためには、全ての教師の共通理解と協力的な指導体制のもと、進路指導の諸活動を統括する全体計画を立て、校内組織を整備して一貫性のある指導を進めることが大切です。

全体計画の主な内容

- 学校の進路指導の目標
- 当該年度の取組の重点、あるいは当該年度の基本方針
- 各学年の指導の目標
- 各教科等における指導内容
- 全体計画実施に必要な基盤や配慮事項 など

イ 学級（ホームルーム）活動における進路指導の年間指導計画

学級（ホームルーム）活動は、学校の教育活動全体を通じて行われる進路指導を補充、深化、統合する場です。学級担任は、児童生徒の入学時から卒業時までを展望しながら年間指導計画を作成し、指導に当たることが大切です。

年間指導計画作成の留意点

- 学級（ホームルーム）活動の内容に基づいて指導内容を明確にし、指導時間数を十分確保すること
- 児童生徒一人一人の実態や課題、発達の段階などを踏まえて計画すること
- 各時間で取り上げる題材、その指導目標、指導内容・方法、指導上の留意点、教材・指導資料などを考え、時期、時間などの関連を考慮した内容にすること

ウ 進路相談

進路相談は、児童生徒の個性の発見・伸長に努め、一人一人が主体的に適切な進路選択を行う能力の育成を目指して計画的、継続的、総合的に行うことが大切です。

そのためには、在り方生き方について共に考えるという姿勢をもつとともに、考える時間の保障や情報の提供をするなど、進路の選択・決定に至るまでの過程を重視しながら、一人一人の夢や希望の実現を目指して支援することが大切です。

エ 学校と家庭・地域社会とのパートナーシップ

進路指導を効果的に行うためには、学校の進路指導の方針や内容について、家庭や地域社会の理解を得ることが大切です。

そのためには、アカウントビリティの考え方に立ち、保護者面談、進路に関する説明会の実施、「進路だより」といった定期的な進路情報の提供などを通して、学校と家庭・地域社会とのパートナーシップ（双方向の協力関係）がより深められるようにすることが大切です（アカウントビリティについては、「4 学校経営」を参照。）。

学級（ホームルーム）活動における活動内容と担任の役割

活動内容	担任の役割
○ 進路の適性の吟味や理解にかかわること	◇ 学級（ホームルーム）づくりを通して児童生徒理解に努める。
○ 進路情報の理解と活用にかかわること	◇ 学級（ホームルーム）経営の構想に進路指導を位置付け、その実践に努める。
○ 望ましい職業観の形成にかかわること	◇ 進路相談の実践に努める。
○ 将来の生活設計にかかわること	◇ 進路情報の収集とその活用にあつめる。
○ 適切な進路選択にかかわること	◇ 校内の進路指導委員会などとの連携を深める。
○ 進路先への適応にかかわること	

進路相談の年間計画の例（中学校）

進路相談				教育相談
月	第1学年	第2学年	第3学年	全学年
4 5	中学校生活と進路 将来の進路と中学校生活の在り方を考え、充実した学校生活を送る心構えをもつ。	1年間の進路見通し 1年次の反省をもとに、学習や進路についての具体的な見通しをもつ。	1年間の進路見通し 進路希望を明確にし、その達成に向けての課題を把握し、年間の見通しをもつ。	- 1学期 - 《主なねらい》 ・学校生活への適応 ・生徒理解と信頼関係の構築 ・悩みや問題の解決 ・問題傾向の把握 など
6	将来の希望 現時点での将来の夢や進路について話し合い、興味・関心をもつ。	進路希望の具体化 現在の進路希望について吟味し、具体的な進路の方向について考える。	進路希望の仮決定 進路希望を仮決定し、目標や努力点について相談し、進路実現への意欲をもつ。	
進路相談週間				
7 8	学習と進路 進路と学習の関係について考え、学習計画の反省や学習方法の効率化について話し合う。	学習と進路 学習上の悩みについて話し合い、今後の学習活動について意欲をもつ。	学習と進路 学習上のつまづきや計画の修正などについて話し合い、学習の仕上げに対する心構えをもつ。	- 2学期 - 《主なねらい》 ・悩みや問題の早期発見

インターンシップの推進

将来の職業生活に必要な基礎的な知識や技術・技能の習得、望ましい勤労観や職業観の育成は全ての生徒に必要なものです。また、技術革新の進展や経済・産業の変化や構造転換などが急速に進む中で、学校教育を終えた後も新たな知識や技術・技能を身に付け、生涯にわたって自己の職業生活をたくましく切り拓いていこうとする意欲や態度、目的意識などを培うことがこれまで以上に大切になっています。

こうしたことから、高等学校では、生徒が自らの学習内容や将来の進路等に関連した就業体験を行う「インターンシップ」が進められています。また、中学校においても地域の企業などで体験的に学ぶ機会をもつ実践が進められています。